

平成二十八年十月十日発行
皇學館論叢第四十九卷第五号
抜刷

『日本書紀』 人名呼称表記
—— 類別とその変遷 ——

伊
藤
匡
芳

皇學館論叢 第四十九卷第五号
平成二十八年十月十日

『日本書紀』人名呼称表記——類別とその変遷——

伊 藤 匡 芳

□ 要 旨

従来、『日本書紀』人名呼称法の研究では、カバネを含む表記を中心に検証されてきた。本稿は、カバネ以外にも、敬称・役職や、ウヂ名・個人名を省く呼称法も考察対象とし、より総体的な『日本書紀』人名呼称法の把握とその変遷解明を試みた。大筋を記せば、呼称法は、ウヂ名のない「名＋敬称」を原初とし、敬称・役職・カバネを氏名に後付する尊称的形式から氏と名の間に配す制度的形式への移行を想定。持統朝以降、尊称的古形式が正史・公文書から姿を消すが、公式令授任官条の公的空間における喚辞法や私的な氏族系譜・墓誌などで依然尊称表記として用いられたことを指摘する。

□ キーワード

日本書紀 人名呼称法 尊称 ウヂ カバネ

緒言

『日本書紀』の敬称（宿禰など）・カバネ（臣など）・役職（大臣など）を含んだ人名呼称法を通観するに、大伴金村大連・大伴金村連（氏＋名＋□）と大伴大連金村（氏＋□＋名）のように、同一人物で「氏＋名＋□」（逆称・先名後姓）と「氏＋□＋名」（順称・先姓後名）⁽¹⁾の混用事例が散見される。この表記の違いが意味するものは何か。

先学諸氏は問題意識の中心にカバネを据え、氏＋名＋カバネの逆称・先名後姓は古来の敬讓法としての意味合いが強く、名＋カバネ⁽²⁾↓氏＋名＋カバネ↓氏＋カバネ＋名へ移行してきたとする。また、持統三年二月の位記成立以降は氏＋カバネ＋名の順称・先姓後名に公文書表記が統一されるも、公式令授位任官条の喚辞など文書以外の場合では依然残遺したと指摘されている。⁽⁴⁾筆者も、逆称の敬讓的用法、持統朝以降の公文書の呼称表記統一、令制喚辞法への残余については異論がない。ただ、ウヂに付帶するカバネが名に付随する氏＋名＋カバネを、ウヂに付す氏＋カバネ＋名以前に設定できるかなどの呼称法移行過程の問題、カバネ以外の敬称・役職を用いた呼称法や、「名＋□」・「氏＋□」・「氏＋□＋名＋□」表記との関係など、細部へ踏み込んだ考察がなされてきたとは言い難い。よって本稿では、『日本書紀』の人名呼称関連表記全般を対象に分類分析し、その変遷について考察する。

なお、旧来の「氏＋名＋□」を逆称、「氏＋□＋名」を順称とする形式名称には、その順序に主観的判断が含まれる。よって、「氏＋名＋□」型から「氏＋□＋名」型への移行に力点を置く本稿では、誤解を招きかねないこの名称は用いない。また、先名後姓・先姓後名についても、カバネ以外の敬称・役職を含む形式も対象とするためそのままで用いず、姓を除いた「先名型」（氏＋名＋□）・「後名型」（氏＋□＋名）とする。その他、蘇我大臣稻目宿禰など先名型

と後名型両型による表記は「融合型」、武内宿禰など名に付す形式を「名単独型」（氏を省略した形式は含まない）、蘇我臣など氏に付して個人をあらわす形式を「氏単独型」とする。

『日本書紀』に見える人名呼称表記を分類すると（表1）を参照。また、以下名とのみ記す場合は形式としての個人名、氏は形式としてのウヂ名を示す、

（1）名単独型（名）＋（a敬称） ……一五三例

（2）先名型（氏）＋（名）＋（a敬称／b役職／cカバネ） ……二七四例

先名型省略（名）＋（a敬称／b役職／cカバネ） ……一四一例

（3）後名型（氏）＋（b役職／cカバネ）＋（名） ……七九〇例

（4）融合型（氏）＋（b役職／cカバネ）＋（名）＋（a敬称） ……一二二例

（5）氏単独型（氏）＋（b役職／cカバネ） ……約一三〇例（個人名使用のみ）

となる。以下、（1）・（2）の名に付属する名系統と（3）・（4）・（5）の氏に付帯する氏系統とに分けて順次考証していく。

α											β		α				β					
14	15			16	17	18	19	20	21		22	23	24	25	26	27	28	29	30			
雄略	清寧	顯宗	仁賢	武烈	繼體	安閑	宣化	欽明	敏達	用明	崇峻	推古	舒明	皇極	孝德	齊明	天智	天武上	天武下	持統	本文	分註
1		2(2			1																89	8
11(2																					23	2
																					20	1
(1					1																9	2
15	4				2																140	13
3	2																				13	153
11	1						1	2	2	2	6(2				2						41	2
																					2	
2																					2	
(1				3	1			1		1				10		4(1		1		22	1
8	4			2	7	2	4	2	5(1	3	3										43	1
(1												1	
								2		1	2										5	5
(1	4		1	2(1	1		2	6	3	4(1	11(1	2	15	2	1		55	3
8				4	(1			(1	4(1	5	3	3	1	11	9(1	(2	7	1	2		64	6
					1				(1					3	1				2		8	1
2														1	2						5	
1	1																				2	
																					3	3
																					6	6
																					1	1
32	6	1		7	15	3	6	8	14	11	17	9	4	19	35	2	26	3	6	10	260	14
					1			2	3		2			1	2	2	1				14	274
23		1						1	10(1	2(1	2(2	2			3						52	4
																					4	
				2						2					1						5	
1										1(1											3	1
								3													3	
5(1				4(1	15							4(1	4	11	1(1				1		45	4
3									2	2						(2					10	2
									4				1								5	
						2		1													3	
32		1		6	15	2		1	16	11	2	6	5	11	5				1		130	11
1				1					1	2	2	1			1	2					11	141
					(1								4							5	
1					7	6	1	7													22	
												1									1	
														1							1	

【表 1】人名呼称法卷別分類表

			β																					
			3	4							5	6	7	8	9	10	11	12	13					
			神武	綏靖	安寧	懿德	孝昭	孝安	孝靈	孝元	開化	崇神	垂仁	景行	成務	仲哀	神功	応神	仁德	履中	反正	允恭	安康	
(1) 名单独型 (名□)	a 敬称	宿禰		(1				1		1(1	10(2	7	1	3	22(1	19	8	1(1		11	1			
		使主														7		1			4			
		別								2	1	1			8	8(1								
		臣										1					6(1							
	計	本文						1		4	13	9	1	3	31	35	15	3		11	5			
分註				1											1	1	1	1						
(2) 先名型 (氏名□)	a 敬称	宿禰								1	2					1	1	1	1			1		
		使主															5	3	5					
		別																			1			
	b 役職	大臣																						
		大連										2							1					
		大夫																						
	a b	宿禰大臣																						
	c カバネ	臣																						
		連											1		3				1		1			
		君													1									
		公																						
		直																						
		真人																						
		朝臣																						
		(新)宿禰																						
	計	本文										2	1		4	1	5	3	7		2	1		
		分註																						
先名型省略 (名□)	a 敬称	宿禰														2	2	2			2			
		使主																		4				
	b 役職	大臣																						
		大連										1												
	a b	宿禰大臣																						
	c カバネ	臣																						
		連																	2		1			
		君																						
		直																						
	計	本文										1				2	2	4		5	2			
分註																								
	b 役職	大臣																						
		大連																						
		内臣																						
		博士																						

α											β		α				β						
14	15			16	17	18	19	20	21		22	23	24	25	26	27	28	29	30				
雄略	清寧	顯宗	仁賢	武烈	繼體	安閑	宣化	欽明	敏達	用明	崇峻	推古	舒明	皇極	孝德	齊明	天智	天武上	天武下	持統	本文	分註	
																					1		
10(2		2	2(2		5	2		11	1		10	16	5	12(2	24(2	5(2	8	35	25	2	177	10	
6		1	1		3	1		3(1			4	13	4	15	15(2	15(7	6(2	35	37	10	175	13	
2					2	1			1	2(1		2	4		6	4(1	8	15	6	3	59	4	
4						3		4	5	1	2(2	3	2	1	8(1	(2	1	18	9		68	6	
1									2	1		2	1	1	5		1	3	2	2	21		
1					3			5	4		2	2	1		4		2	7	2	1	35		
1	1	(1							1	2		2		1	2	2	3(1	6	11	2	34	2	
5									1			1					1		3	2	13		
																					6	1	

			β																			
			3	4							5	6	7	8	9	10	11	12		13		
			神武	綏靖	安寧	懿德	孝昭	孝安	孝靈	孝元	開化	崇神	垂仁	景行	成務	仲哀	神功	応神	仁德	履中	反正	允恭
(3) 後名型 (氏□名)	cカバネ	使主																				
		臣																2				
		連															1	1	3(1		1	
		君											1				1(2	1				
		公																				
		直													1	(1		3	2		1	
		史																				
		首																1				
		造																				
		村主																				
		漢人																				
		真人																				
	朝臣																					
	(新)宿禰																					
忌寸																						
計	本文												1		1		2	6	7		2	
	分註															1	2		1			
(4) 融合型 (氏□名□)	b a	大臣・宿禰																				
	c a	連・宿禰																				
		君・宿禰																				
	計																					
(5) 氏単独型 (氏□)	b 役職	大臣																				
		大連																				
		大夫																				
		内臣																				
		右大臣																				
		内大臣																				
	cカバネ	臣																				
		連																				
		君																				
		直																				
		史																				
		首																				
		造																				
		真人																				
	cカバネ(關名)	臣																				
		連																				
		君																				
		直																				
		首																				
計	本文																					
	分註																					

註1 (1)の臣は敬称としての臣。六雁臣・田狹臣・大樹臣などウチ名成立以前のもの。

註2 カバネの「(新)宿禰」は天武新姓の「宿禰」のことを示す。

註3 表中の括弧は、その形式の分布中心を大まかに示したもの。

註4 巻上の α (中国系)・ β (倭習)の分類は、森博達『日本書紀の謎』(中公新書、1999年)による。

一、呼称表記の分類——名系統——

(1) 名単独型

名単独型 a (名)+(a 敬称) ……一五三例

武内宿禰(四一例)・野見宿禰(二〇例)・根使主(二五例)・荒田別(四例)など、ウヂ名を冠さず名に敬称を付した表記が一五四例見られる。【表1】で、分註を除けば孝元紀から雄略紀まででそのほとんどを占めており、他表記に比して古い。ウヂ名・カバネ以前の呼称とみられ、もつとも古い個人名呼称法であるとされている。⁽⁵⁾また、政治的地位の高い個人名に敬称を付す例が多く、尊称表現とブレカバネの性質を有している。⁽⁶⁾

五世紀後半の稻荷山古墳出土鉄剣銘に足尼(スクネ)・獲居(ワケ)と、ウヂ名・カバネ以前の、称号に近い尊称⁽⁷⁾が見え、この種の名に敬称を付す形が諸呼称法の原型であったことは明らかである。この銘からは、政治的地位をあらわすとともに、祖先への尊称としての機能を有していたこともわかる。

(2) 先名型 (氏)+(名)+(a 敬称) / b 役職 / c カバネ ……二七四例

先名型 a (氏)+(名)+(a 敬称) ……四七例 / 省略 (名)+(a 敬称) ……六〇例

蘇我稲目宿禰など、前述の敬称(宿禰・使主・別)で抽出した形式、宿禰(四三例)・使主(二例)・別(二例)がある。この先名型 a から氏を省略した(名)+(敬称)(馬子宿禰など)も六〇例見える。これは、名単独型のウヂ名が存在しない時期に個人名へ付した(名)+(敬称)とは、先名型 a の省略形という点で大きな性質の違いがある。『日本書紀』の

人名呼称表記を一覧するに、敬称を用いる場合、氏を省略することはあっても名を省くことは皆無である。⁸⁾ 名に付属させるのが通常であった遺風を受けたものといえる。また、氏を略した一四一例中六〇例（四二・六％）が「名＋敬称」であり、氏を外すことへの躊躇の無さが一段と見てとれる。

『日本書紀』内での使用範囲は、神功紀の中臣烏賊津使主から孝徳紀の蘇我稻目宿禰・蘇我馬子宿禰までであるが、孝徳紀の二例は物語の会話内での登場である。実態は崇峻紀の紀男麻呂宿禰・蘇我馬子宿禰までで切れ目となる。時代分布を他の呼称法と比べてみると、名単独型に準じて古く、元始的な名単独型にウヂ名を加えた単純な形式であることから、ウヂ名成立後、名単独型にウヂ名を冠して使用され出したものと推察される。また、敬称が先名型のみに見えることも、この型がウヂ名成立後に名単独型に続く古形式として発生したものであることを顕示している。

最も多い宿禰の具体例を初出順に挙げる。

応神紀：的戸田宿禰（一、仁徳紀二）、紀角宿禰（二、仁徳紀二）、羽田矢代宿禰（二、履中紀二）、平群木菟宿禰（一、

履中紀二）

履中紀：蘇賀満智宿禰（二）、物部大前宿禰（二、安康紀二）

雄略紀：紀大磐宿禰（二）、紀小弓宿禰（八）、蘇我韓子宿禰（二）、物部菟代宿禰（二）

顯宗紀：紀生磐宿禰（二） 宣化紀：蘇我稻目宿禰（二、孝徳紀二）

欽明紀：紀男麻呂宿禰（二、崇峻紀二）

敏達紀：蘇我馬子宿禰（二、崇峻紀六、用明紀二、孝徳紀二）

宿禰は紀・平群・蘇我氏など、武内宿禰系の有力者を主とした用法である。物部氏も二名含まれ、菟代宿禰は不明であるが、大前宿禰は『先代旧事本紀』巻五「天孫本記」（以下、『天孫本紀』⁹⁾）に物部大前宿禰連公とある。後半は蘇我

『日本書紀』人名呼称表記（伊藤匡）

稲目・馬子父子が大半を占め、馬子を最後に用例がなくなる。これをもって「蘇我臣」使用を馬子以降とみる向きもある。^⑩

先名型 b (臣+名+〔b 役職〕) …六八例／〔氏を省略〕…九例

蘇我稲目大臣など役職を付加する形式で、垂仁紀の物部十千根大連から天武紀下の蘇我赤兄大臣まで見られる。内訳は大臣二三例、大連四四例、大夫一例であり、分布の中心は、雄略から崇峻紀である。この形式は、大臣や大連などの役職成立後、敬讓表現として先名型 a の呼称法の延長線上で用いられた用法であろう。大臣の六三・六%、大連の八一・五%が先名型であることもその裏付けとなる。さらに、日野昭氏の、蘇我馬子への敏達・用明・崇峻紀の宿禰、推古紀の大臣への統一をもつて、敬称表記の古さと役職表記の新しさを示すとの指摘も参考となる。^⑪

具体的には、

大臣 清寧紀：平群真鳥大臣 (二) 継体紀：許勢 (巨勢) 男人大臣 (二、安閑紀二)

敏達紀：蘇我馬子大臣 (一、崇峻紀二)

孝徳紀：阿倍倉梯麻 (万) 呂大臣 (四、天智紀二)、蘇我 (山田) 石川万侶 (麻呂) 大臣 (六、天智紀二)

天智紀：蘇我連大臣 (二)、蘇我赤兄大臣 (二、天武紀下二)

大連 垂仁紀：物部十千根大連 (二) 履中紀：物部伊呂弗大連 (二)

雄略紀：大伴室屋大連 (五、清寧紀五)、物部目大連 (三)

武烈紀：物部龜鹿火大連 (一、継体紀三、安閑紀一、宣化紀二)

継体紀：大伴金村大連 (四、安閑紀一、宣化紀二、欽明紀一、敏達紀二)

欽明紀：物部尾輿大連 (二)

敏達紀：物部（弓削）守屋大連（五、用明紀三、崇峻紀三）

大夫 敏達紀：中臣勝海大夫（一）

と、宿禰が武内宿禰系を中心に使用されたのに比べて、大伴・物部氏なども含む最高執政官への尊称表現として対象が拡大している。『天孫本紀』物部氏系図に物部目大連公、『古屋家譜』¹³に大伴室屋大連公・大伴金村大連公、『紀氏家牒』¹⁴に平群真鳥大臣・物部守屋大連などがあり、王権の要職にあった祖先を表記する際にも充用されている。この先名型bの場合も、氏を省略して名＋〔役職〕（九例）とすることがある。

先名型 a b 〔氏＋名〕＋〔a敬称〕〔b役職〕…五例／〔氏を省略〕…三例

蘇我稲目宿禰大臣など、先名型bと先名型cが融合した重々しい表現である。欽明紀に蘇我稲目宿禰大臣が二例、崇峻紀に二例・用明紀に一例の蘇我馬子宿禰大臣と、稲目・馬子父子に限って見え、『古事記』にも「宗我之稲目宿禰大臣」（欽明記）・「稲目宿禰大臣」（用明記）と一例ずつある。書き振りに限って、人名に敬称が付けられた先名型aに、役職を累加することでこの形になったものと思われる、敬称形式に対する役職形式の真新しさを物語ろう。この後付を重ねる所作は、称号を名の下に配することが当然のこととして意識されていた時のものであり、氏に付帯させ、さらに氏に冠するようになる以前のことであろう。この蘇我稲目・馬子両名のみへの適用状況からは、この両者の活動時期が、敬称表記から役職表記へ混用されながら移行する期間とも解せる。またこの形式では、蘇我馬子宿禰大臣の氏省略型としてのみ三例見える。

先名型 c 〔氏＋名〕＋〔cカバネ〕…一五四例

蘇我蝦夷臣などカバネを付す形式で、景行紀の大伴武日連から持統紀の大伴御行宿禰まで見え、分布は雄略紀と武烈から天智紀が中心となる。氏に対して副次的なカバネが名に属すこの形式は、名単独型の延長線上として捉えるべ

『日本書紀』人名呼称表記（伊藤匡）

きであろう。氏を省いた名＋「カバネ」が六八例見えることも、名に付随している証左である。

一五三例と事例が多く全てを例示することは避ける。巻別分布は表1を参照されたい。数例事例の多いものから順にあげると、

一五例：中臣鎌子（鎌足）連（皇極紀一〇、孝徳紀五）

八例：蘇我赤兄臣（齊明紀一、天智紀六、天武紀上一）

七例：巨勢德太（陀）臣（孝徳紀二、皇極紀四、齊明紀一）

五例：物部目連（雄略紀五）、中臣金連（天智紀四、天武紀上一）

四例：大伴金村連（全て武烈紀）

となり、権力中枢を担う者への用例が多い。全一五三例中、八一・七％が臣・連と、王権内で高い政治的地位にある者が核となっており、先名型cは上部支配者層への尊称と言える。また、【表2】からは、年代が下るにつれて高位に限定されていく傾向が看取される。尊称で称呼されるものがより上層部に限られていく過程は、令制整備とともに厳格な階層化が進行していく過程と適合するものであろう。

この形式は、古系譜にも用例があり、『天孫本紀』物部氏系図（物部麁鹿火連公など）¹⁵・尾張氏系図（尾治弟彦連など）・『丹生祝氏本系帳』¹⁶（丹生麻呂首）に先名型cが、氏省略型が『和邇部系図』¹⁷（日爪臣など）・『伊福部臣古志』¹⁸（阿佐臣など）と、祖先への尊称として使用されている。先名型が過去における有力人物への尊称としてだけでなく、後世において氏族内の祖先への敬讓表現として機能していたことはおさえておくべきである。ウヂを代表する祖先へは猶更であつたろうし、単に祖先という一義で尊称を適用することもあったであろう。

天武紀以降の先名型c・後名型c全体における割合を見るに、先名型c一二・四％、後名型c四八・七％と、後名

【表2】各位階別にみた先名型・後名型の分布

推古11年			大化5年			天智3年			天武14年			大宝令制
冠位	後名 (氏□名)	先名 (氏名□)	冠位	後名 (氏□名)	先名 (氏名□)	冠位	後名 (氏□名)	先名 (氏名□)	冠位	後名 (氏□名)	先名 (氏名□)	冠位
			大織			大織			正大弔			正一位
			小織			小織			正広弔			従一位
									正大弔			
			大縫			大縫			正広弔			正二位
			小縫			小縫			正大參			従二位
									正広參	1	1	
			大紫			大紫		1	正大肆			正三位
大德			大花上			大錦上	2	6	直大弔	1	1	正四位上
						大錦中		1	直広弔	2		正四位下
小德	10	1	大花下	2		大錦下	3		直大弔	2		従四位上
									直広弔	2		従四位下
大仁	2		小花上			小錦上	2		直大參	6		正五位上
						小錦中	7		直広參	7		正五位下
小仁			小花下	1	1	小錦下	18	(1	直大肆	6		従五位上
									直広肆	21		従五位下
大礼	1		大山上	1		大山上	4		勤大弔			正六位上
									勤広弔			
									勤大弔	2		正六位下
小礼			大山下	3		大山中			勤広弔			
									勤大參			従六位上
						大山下	3		勤大肆			従六位下
大信			小山上	1					勤広肆	1		
						小山上			務大弔			正七位上
									務広弔			
小信			小山下	1					務大弔	2		正七位下
						小山中	1		務広弔			
									務大參	1		従七位上
大義			大乙上	1					務広參			
						小山下	5		務大肆	1		従七位下
									務広肆			
小義			大乙下			大乙上	2		追大弔			正八位上
						大乙中	1		追広弔			
大智			小乙上			大乙下	2		追大弔	1		正八位下
									追広弔			
小智			小乙下	1		小乙上	1		追大參			従八位上
						大乙中			追広參			
						小乙下	1		追大肆			従八位下
									追広肆			

註1 各位階の対応は、岩波文庫版『日本書紀5』巻末の付表・付録によった。

註2 「直広肆八口朝臣音標」など、位階を冠した先名型・後名型のための分布である。ただし、推測にとどまるものについては省いてある。

型に統一されていく傾向にある。その中にあらわれる、先名型c一九例は先名型の特性を示す素材となろうことから、以下順に見ていく。

天武紀上三例は、壬申の乱以前に吉野宮に向かう大海人皇子を見送る記事に、左大臣蘇賀赤兄臣・右大臣中臣金連・大納言蘇賀果安臣と見える。近江朝首脳陣三名は天智紀では赤兄(七)・金(四)・果安(二)全て先名型c表記である。天武紀上内の壬申紀では赤兄(二)・金(二)・果安(四)全て後名型cであることを勘案すると、天武紀上の先名型c三例は天智紀に用いた天智朝関連資料と同類のものであったと推測する。

次に、天武紀下にある六例は、「坂本財臣卒」「物部雄君連忽発病而卒」「大三輪眞上田子人君卒…謚曰大三輪神眞上田迎君」「大伴杜屋連卒」と全て薨卒記事である。諸氏族などの薨卒伝を利用したため、先名型で記された氏族のものがそのまま残入されたのであろう。墓誌(次章二節)¹⁹にこの型式が多く見えることもその傍証となる。

ただし、持統紀はそう単純にはいかない。¹⁹三年正月・六月の筑紫大宰としての粟田真人朝臣記事二例は、筑紫大宰以前の天武紀上には二例とも後名型cで記されていることから、大宰府関連の史料を用いたことによるものである。また、四年正月の即位儀礼において、大盾を樹てる物部麻呂朝臣、天神寿詞を読んだ中臣大嶋朝臣、賀騰極を奏上した丹比嶋真人・布勢御主人朝臣の四例みえる。儀礼の場であること、物部麻呂・中臣大嶋が旧姓で記されていることから、儀礼記録の記載をそのまま登載したものと推量される。中臣大嶋に続いて神璽剣鏡を奏上した忌部宿禰色夫知は後名型cで表記され、位階の高下による儀礼の場での称呼法の違いが想定されよう。後述の公式令授位任官条では、御前における授位任官時以外の人名呼法には先名型がとられており、本四例はその前身とも考え得る。その他、四年七月の丹比嶋真人の授位(正広参)任官(右大臣)、五年正月の丹比嶋真人(三百戸)・布勢御主人朝臣(八十戸)・大伴御行宿禰(八十戸)加封記事の四例ある。【表3】のように大臣任官記事は雄略紀三例と皇極紀一例を除いて先

【表3】『日本書紀』にみえる最高執政官補任記事

卷数	天皇	人物	役職		形式
12	履中	平群木菟宿禰	執国事		先名型 a
		蘇賀満智宿禰			
		物部伊弉弗大連			先名型 b
14	雄略	平群臣真鳥	為大臣		後名型 c
		大伴連室屋	為大連		
		物部連目			
15	清寧	大伴室屋大連	大連	並如故	先名型 b
		平群真鳥大臣	大臣		
16	武烈	大臣平群真鳥臣	專擅国政		先名型 c
		大伴金村連	為大連		
17	繼体	大伴金村大連	為大連	並如故	先名型 b
		許勢男人大臣	為大臣		
		物部龜鹿火大連	為大連		
18	安閑	大伴金村大連	為大連	並如故	先名型 b
		物部龜鹿火大連	為大連		
	宣化	大伴金村大連	為大連	並如故	先名型 b
		物部龜鹿火大連	為大連		
		蘇我稻目宿禰	為大臣		先名型 a
		阿倍大麻呂臣	為大夫		先名型 c
19	欽明	大伴金村大連	為大連	並如故	先名型 b
		物部尾輿大連			
		蘇我稻目宿禰大臣	為大臣		先名型 a b
20	敏達	物部弓削守屋大連	為大連	如故	先名型 b
		蘇我馬子宿禰	為大臣		先名型 a
21	用明	蘇我馬子宿禰	為大臣	並如故	先名型 a
		物部弓削守屋連	為大連		先名型 c
	崇峻	蘇我馬子宿禰	為大臣	如故	先名型 a
23	舒明	蘇我蝦夷臣	為大臣		先名型 c
24	皇極	蘇我臣蝦夷	為大臣	如故	後名型 c
25	孝德	阿倍内摩呂臣	為左大臣		先名型 c
		蘇我倉山田石川麻呂臣	為右大臣		
		中臣鎌足連	為内臣		
		巨勢德陀古臣	為左大臣		先名型 c
27	天智	大伴長徳連	為右大臣		
		蘇我赤兄臣	為左大臣		先名型 c
		中臣金連	為右大臣		
		蘇我果安臣			
		巨勢人臣	為御史大夫		
		紀大人臣			
30	持統	丹比嶋真人	為右大臣		先名型 c

名型であり、先名型を基軸とした補任記録の存在とともに、議政官任命時の呼称法が先名型であったことを示唆しう。加えて、授位任官などの儀礼時に尊称として先名型で称呼していた様子が窺え、公式例授位任官条との関係が推される。

二、呼称表記の分類——氏系統——

(3) 後名**型** $\text{氏}+(\text{b役職}/\text{cカバネ})+\text{名}$ ……七九〇例

後名**型** **b** $\text{氏}+(\text{b役職})+\text{名}$ ……二九例

蘇我大臣蝦夷などと、氏と名の間に役職を配す形式で、雄略紀の大臣大連室屋から孝徳紀の高向博士黒麻呂まで二九例見られるが、後名**型**七九一例の内三・七％に過ぎない。後名**型**のうち、主要な表記法ではなかったとみえ、後名**型**がこの後名**型** **b**に発するとは考えにくく、次の後名**型** **c**に後発する形式であろう。以下事例を列挙する。

大臣 継体紀：許勢大臣男人 (二) 皇極紀：蘇我大臣蝦夷 (四)

大連 雄略紀：大伴大連室屋 (一、継体紀二) 継体紀：大伴大連金村 (三、安閑紀四、欽明紀三)、物部大連鹿鹿

火 (三、宣化紀二) 安閑紀：物部大連尾輿 (二、欽明紀四)

内臣 推古紀：阿倍内臣鳥 (二) 博士 孝徳紀：高向博士黒麻呂 (二)

前述先名**型** **b**の大臣・大連と見比べると、先名**型**は雄略紀から多く見え、継体紀以降に分布の中心がある後名**型**の新しいさが判然とする。大伴氏内で、大伴室屋が先名**型** 一一例 (先名**型** **b** 一〇、先名**型** **c** 一)・後名**型** 三例 (後名**型** **b** 二、後名**型** **c** 一)、二代下の大伴金村が先名**型** 一三例 (先名**型** **b** 九、先名**型** **c** 四)・後名**型** 一〇例 (全て後名**型** **b**) と、時代が下ると後名**型**が多くなることもこの形式の真新しさを示す。

後名**型** **c** $\text{氏}+(\text{cカバネ})+\text{名}$ ……七六一例

蘇我臣蝦夷などのカバネを配置する呼称表記である。景行紀の諸県君泉媛から持統紀の巨勢朝臣粟持まで七六一例

と後名型の九六・三%、先名・後名・融合型を合わせた全体一〇七六例の中でも七〇・七%と、『日本書紀』人名呼称表記の大半を占める形式である。雄略紀以降に多く見え、中でも、天武紀上下・持統紀で三七〇例と後名型cの四八・七%を占め、制度的な新姓適用後における統一感が漂う。²¹カバネを用いた先名型とカバネ別占有率を比較すると、臣・連が四九・二%と明らかに低く、低位のカバネのほとんどが後名型をとっている。

紙幅上七六一例全てを逐一検証できず、全体の傾向は表1に譲り、先名型c同様出現数の順に数例示す。

九例：中臣（藤原・葛原）連中嶋（天武紀下六、持統紀三例）

七例：蘇我臣入鹿（全て皇極紀）、伊吉（杵岐）連博徳（斉明紀四〔全て分註の書名〕、天智紀一、持統紀二）、物部（石上）

連麻呂（天武紀上一、天武紀下四、持統紀二）

六例：坂合（境）部連石（磐）積（孝徳紀一、天智紀二、天武紀下二）、多臣品治（天武紀上四、天武紀下一、持統紀一）

五例：守君大石（斉明紀三、天智紀二）、大伴連（宿禰）御行（天武紀下二、持統紀三）、田中朝臣法麻呂（全て持統紀）

四例：倭直吾子籠（仁徳紀一、履中紀二、允恭紀二）、穗積臣押山（全て継体紀）、河辺臣瓊缶（欽明紀四）、高向史（漢人）

玄理（推古紀一、舒明紀一、孝徳紀二）、穗積臣咋（噉）（全て孝徳紀）、塩屋連鰯魚（小戈）（全て斉明紀）、紀臣阿

閉麻呂（天武紀上二、天武紀下二）、布勢朝臣御主人（天武紀下一、持統紀三）

一見して先名型cと異なる特徴は、人名表記の斑が多いこと、数の割に重出が少ないこと、継体紀以降の先名型よりも下った時代が多い、先名型cの重出上位者と全く重複しないことである。人名表記の斑は異なった史料に基づいていることに起因し、重出の少なさと使用対象者の多さは、後名型cが広く定着していたことをあらわしている。そして、その時代の新しさはこの型の時代性を反映するものと言える。大臣・大連・大夫層中心の先名型c上位者との不一致は、その性質の相異をあらわすもので、先名型のように権力中枢を担う人物、氏族の要となる祖先への尊称とし

てではなく、官人への一般的、制度的な人名呼称法として用いられたものと考ええる。

また、後名型に敬称を用いる例は皆無である。これは、氏に敬称を付すことが相応しくないと認識や、敬称を付す意識が軽薄となった世相にもようろう。その中で、尊称的な表記を為す場合は、カバネを従前の名の後に位置付ける方法をとったものであろう。

後述の氏単独型の如く、名を省くことはあっても、氏を略した事例は蘇我蝦夷を「大臣蝦夷」と記した皇極紀（皇極天皇四年六月丁酉朔戊申条）の一例に限られ、ウヅに付随するものであることは明白である。ウヅに付帯するカバネの性格をよくあらわす事例といえる。また、ウヅ名とカバネ名を合わせて「姓」ととらえる認識⁽²²⁾もその微証となる。

(4) 融合型 (氏)+(b役職/cカバネ)+名+(a敬称) ……二例

融合型 b a (氏)+(役職)+名+(敬称) ……一〇例

蘇我大臣稻目宿禰が宣化・欽明・用明紀に合わせて九例、蘇我大臣馬子宿禰が敏達紀に一例みえる。蘇我氏のなかの敬称宿禰の使用は、蘇我稲目と馬子に限られており、『日本書紀』が用いた系譜・家記による事由が察せられる。

形式としては、氏に役職を、名に敬称を付す新式に旧式を足した様式で、後名型bの(氏)+(役職)+名に敬称を付して敬讓の意味合いを強めたものであろう。後名型が普及した後、古く宿禰の称呼法で表現されていた稲目・馬子に敬称を付して重々しくも尊称表現として用いたものとみてよい。

融合型 c a (氏)+(カバネ)+名+(敬称) ……二例

坂合部連贇宿禰（雄略紀）、狭狭城山君韓倍宿禰（顯宗紀）の二例ある。この例も、融合型b a同様、敬称を付して尊称表現にしたものである。坂合部連・狭狭城山君と、王権内の権力中枢にあった有力氏族とはいえず、この場合は、

有力者呼称法としての尊称と言うよりは、子孫から祖先を称呼する際の尊称表記とみるべきであろう。後名型が一般的な人名呼称法として定着した時期に、系譜・家記などで祖先を表記する際、強引に古来の敬称を付す形式を追加し、尊称形式としたものであろう。

(5) 氏単独型 〔氏〕+〔b役職〕／cカバネ〕…一三〇例

名を略すもウヂに役職・カバネを付して、個人名として使用している例を取り上げる。後名型の省略ともいえるが、敢えて省いてウヂに個人を投影しており、先名型の省略型のような単なる省略と判じることができない。ここでは、独自に項を設けて取り扱うこととする。ただその際、闕名も含め名を欠いたためこの形式となつたのか、意図的に略して通用させたものなのか判断は難しく、個人を示しているか判定し難いものもある。その他、見落としがあるやもしれず、b・cを合わせて大まかな傾向や性質を述べるにとどめる。

氏単独型b 〔氏〕+〔役職〕…五一例／氏単独型c 〔氏〕+〔カバネ〕…四二例

氏単独型bでは雄略紀の身毛君大夫（未詳）から天武紀下の藤原大臣（藤原鎌足）、氏単独型cでは雄略紀の膳臣（未詳）から持統紀の丹比真人（丹比嶋）までとはほぼ同じ分布である。双方とも雄略紀以降のみに見え、他形式よりも時代が下る。全体を通して、氏単独型bが五一例とカバネを付す氏単独型c四二例（闕名除く）よりも多い。これは、圧倒的多数にカバネを付す後名型と大きく異なる点である。名を略す以上、大臣・大連・大夫・内臣など、人物を特定できるものが多用されやすい傾向をあらわそう。ただし、ウヂに敬称を付して使用する例は無く、ウヂに役職・カバネを付帯する形式は後名型と同質である。

氏単独型bは、役職で個人を特定する性質上、平群大臣（真鳥）・大伴大連（室屋・金村）・物部弓削大連（守屋）・

蘇我大臣（馬子・入鹿・石川麻呂）蘇我右大臣（石川麻呂）・藤原内大臣（鎌足）など、ウヂを代表する者が多いことは至当である。反面、氏単独型とはという個人特定が難しいものが少なくない。大化二年三月辛巳条の八群にわたる朝集使報告には闕名一二例を含む二一例みえ、当時は個人特定が可能であつたと推察されるが現在ではほぼ特定不能である。このような事例は、限られた地域や空間でのみ省略しても通用した呼称が、そのまま正史に登載されたことを示すものといえる。

ウヂに付すこの形式は、名に付随する形式程古いものではない。ウヂと付帶的なカバネとの関係とウヂに個人を代表させて通用する状況を勘考すれば、カバネ創出後のさらにウヂ名が定着して以降のものであり、後名型成立後に位置付けられよう。

以上の二形式以外に、欽明紀に蘇我卿（二）、雄略紀に大伴卿（二）・紀卿（二）との記載が見えるが、⁽²³⁾ 先名・後名・融合型ともに一例も無い。これは中国に倣った新しい表記であろう。⁽²⁴⁾ α群の巻のみに見えることからその蓋然性は高く、編纂時の叙述で卿の字に改変、もしくは挿入されたものであろう。

三、呼称表記の変遷と展開

1、変遷

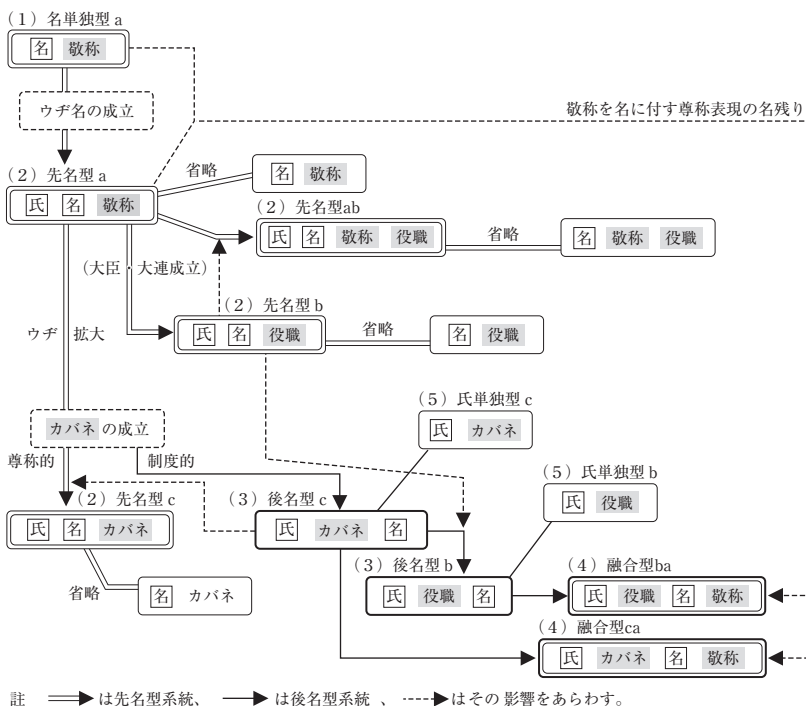
ウヂの発生は五世紀前半から六世紀前半、カバネの成立は五世紀前半から六世紀前半の幅で諸説あるが、⁽²⁴⁾ ウヂがカバネに先行することは動かないであろう。⁽²⁵⁾ これを前提とし、これまで検討してきた人名呼称の諸形式の変遷過程を、その性質や前後関係などから推考する。

ウジ名成立以前における呼称表記の原初形態は、名単独型である。その後、ウヂ名発生にともなつて、名に敬称を付す形式を継承する先名型 a (氏+名+〔敬称〕) が用いられるようになったと考えられる。先名型 a が、先名型 b (氏+名+〔役職〕)、先名型 c (氏+名〔カバネ〕) よりも分布中心が古いこともその証左となる。また、ウヂに付帶して古形呼称法の敬称が用いられることがない(後名型・融合型・ウヂ単独型ともない)ということは、ウヂに付す形式の新しさを示すとともに、名に付属する形式の古さと尊称としての機能を物語る。ウヂに付す後名型よりも先名型が先発であることは明らかである。⁽²⁶⁾

先名型 b の役職を付す形式は、大臣や大連などの役職がいつ頃成立したのかにもよるが、先名型 a に役職を付加する先名型 a b (氏+名+〔敬称〕+〔役職〕) を見るに、先名型 a よりも時代が下ることは確実である。その先名型 a b は、先名型 a に後発の先名型 b を累加して成ったもので、先名型 a・先名型 b 以降のものである。

問題は先名型 c (氏+名+〔カバネ〕) との関係であるが、これは、カバネ成立の時期によつて異なってくる。役職とカバネの成立には諸説あり、本稿が依る説をみないが、両者とも尊称としての先名型 a の機能を継承しているといふことは共通している。

他方、名の前に配置する後名型は、ウジに付帶するカバネの発生を契機として、百濟・新羅系人名呼称法の影響を受けながら生じた⁽²⁷⁾とみられる。この型には後名型 b (氏+〔役職〕+名) と後名型 c (氏+〔カバネ〕+名) とがある。カバネを含む形式については、ウヂに付帶する性質上、後名型 c が先行するもので、先名型 c が後発と考えられる。従来、先名型 c が後名型 c に移行したとみられてきたが、それは、プレカバネともいふべき敬称とカバネを混同したため生じた誤解であろう。後名型が制度的な面を有した人名呼称法として用いられるようになる中、身分階級の上層、もしくは同族内での祖先名を表現する方法として、従前より尊称がとってきた配列の先名型を使うようになった



【図】 人名呼称法の変遷

とみる。

役職を含む後名型bについては、カバネ成立にもなつて生じた後名型cの配列に倣つたものであることは言うまでもない。ただし、同じく役職を含む先名型bとの関係は、後名型bが後名型cに倣つて用いられ、その尊称的記述として先名型bとなつたとも、役職成立後に先名型aの影響を受けた尊称表記として先名型bが成り、カバネ成立によつて誕生した後名型cを受けて後名型bに発展したとも解せられる。先名型の先行性を思えば、後者の見方が穩当であらうか。

後名型と先名型の融合型は、後名型c・後名bの表現方法が用いられるようになった後、それを先名型に変換するでもなく、敬称を付して尊称に準じた扱いをしたものである。換言すれば、後名型という制度的

な表記を残したまま、尊称表現としており、後名型がよほど定着した後の表示法といえる。

最後に、名を略した氏単独型 b・c の位置付けである。名を略してウヂ名とカバネなり役職なりで個人を表現するには、それを可能にする認識土壌の醸成が必須である。ウヂが発生し、その紐帯がある程度成熟した段階のことと思われる。その多くが、ウヂを代表する人物の名を略したもので、名を省いても確実に個人認証されることが前提としてある。ウヂを代表する人物の名を省略して、ウヂ名を一個人に負わせるこの方式は、最上級の尊称として新たに使用されるようになったのであろう。氏 + 卿などの、敬称を付帯させることのなかった氏に、中国風の新たな敬称を付した例がそれを指し示す。

これまでの検討から得られた、諸呼称表記の關係性を図示すると、【図】となる。

2、展 開

持統朝の位記成立以降、正史や公的な文書に後名型が定着するが、天皇に臣従する官人として一律に表記形式を統一する意図もあつたことであらう。ただ、先にも述べたように、家記・系譜などには旧来の尊称表記が受け継がれてきた。また、公的な場での喚辞法にもその残滓が見える。そこで次に、令に定められた個人の喚辞法と先に検証した呼称表記との繋がりを見る。公式令授位任官条と、該当する呼称法を併記すると、⁽²⁸⁾

① 天皇の面前で、授位任官の際の喚辞法

三位以上：先_レ名後_レ姓（氏名姓：例 大伴万呂宿禰）…先名型 c
四位以下：先_レ姓後_レ名（氏姓名：例 大伴宿禰万呂）…後名型 c

② 天皇の面前で、授位任官以外の際の喚辞法

『日本書紀』人名呼称表記（伊藤匡）

三位以上：直称^レ姓（氏姓／例・大伴宿禰）…氏単独型^c／若右大臣以上：称^二官名^一（氏官職：左大臣藤原朝臣）
四位：先^レ名後^レ姓（氏名姓）…先名型^c／五位：先^レ姓後^レ名（氏姓名）…後名型^c

六位以下：去^レ姓称^レ名（氏名：大伴万呂）

③ 御所以外の場で、政務の際の喚辞法

太政官 三位以上：称^二大夫^一（氏大夫：大伴大夫）／四位：称^レ姓（氏姓）…氏単独型^c

五位：先^レ名後^レ姓（氏名姓）…先名型^c

弁官八省 五位以上：惣称^二大夫^一

『日本書紀』の呼称表記を用いて関係を見ると、①先名型^c／後名型^c、②氏単独型新（役職）＋^二氏^一＋（カバネ）／氏単独型^c／先名型^c／後名型^c、③氏単独型新（氏＋（敬称））／氏単独型^c／先名型^cである。①の授位任官は個人を対象とする性質上、省略した形をとらないのであろう。この場合は、尊称表記としての先名型が上位となる。②の名を省略した（役職）＋^二氏^一＋（カバネ）は持統紀に「右大臣丹比真人」二例があるのみで、その新奇性が窺える。個人にウヂを代表させる氏単独型^cに、さらに最上位の役職を冠することで氏単独型^cとの差異化を図ったものともいえよう。③はウヂに敬称の「大夫」を付して最上表現とし、その後は②と同一である。この規定は、『続日本紀』養老五年（七二二）十月乙亥条の「太政官処分。唱考之日。三位称^レ卿。四位称^レ姓。五位先^レ名後^レ姓。自今以去。永為^二恒例^一。」と、③の大夫を卿とする以外同一内容である。

これらからは、呼称法として古い尊称的な先名型は喚辞法の中に息づくも、ウヂとカバネで個人を表現することで尊称の意味合いを持たせた用法が、その上位層に使用された。また、『日本書紀』に馴染みのない、敬称の「大夫」・「卿」を氏に付す新形式が、太政官以下において最上級喚辞法の尊称として使われるなど、新旧融合した姿がみられ

るのである。

その他、天武朝以降の墓誌（以下『日本古代の墓誌』奈良国立文化財研究所飛鳥資料館、一九七七年より）に、

・「小野毛人朝臣之墓营造歳次丁丑年十二月上旬即葬」（小野毛人墓誌二面）

・「壬申年將軍左衛士府督正四位上文祢麻呂忌寸 慶雲四年歳次丁未九月廿一日卒」（文祢麻呂墓出土品）

・「下道罔勝弟罔依朝臣右二人母夫人之骨藏器故知後人明不可移破」（下道罔勝罔依母夫人骨藏器 一合）

・「因幡国法美郡伊福吉部德足比壳臣」（伊福吉部德足比壳骨藏器）

・「我祖美努岡萬連飛鳥淨御原天皇御世甲申年正月十六日」（美努岡萬墓誌一面）

・「從三位行左大弁石川石足朝臣長子御史大夫正三位兼行神祇伯年足朝臣」（石川年足墓出土品）

と見え、先に触れた『天孫本紀』・『古屋家系譜』・『和邇部系図』・『伊福部臣古志』・『紀氏家牒』などでの先名型利用と合わせ考えると、氏族内の私的文書・空間では、未だ遺風の先名型が祖先に対する尊称として通用していたことを示すものである。

結 語

以上、『日本書紀』人名呼称表記の検討から、その分類・用法と変遷過程についての仮説を提示した。総括は先の変遷図などに譲り、人名呼称法を用いた『日本書紀』編纂素材への視座を簡便に指摘して擲筆することにする。

蘇我氏を例にとると、満智（一）・韓子（二）・稻目（四）・馬子（二六）まで全て先名型であるが、その直系蝦夷は九分の七、入鹿は八分の七で後名型となる。⁽³⁰⁾かわりに傍系倉麻呂系統の石川麻呂（九）・連子（二）・日向（二）が全て、

『日本書紀』人名呼称表記（伊藤匡）

赤兄が一二分の一〇、果安は七分の三が先名型となる。そして、その次世代安麻呂（二）・虫名（二）が後名型をとることから、安麻呂・虫名、その子石足らが提出した家記・系図などが素材として想察される。近年、蘇我赤兄を再評価する論稿もみられるが、⁽⁴¹⁾そもそも呼称法としては蝦夷・入鹿に比して遥かに高評価である。また、大伴氏では、武日（二）・談（三）・糠手古（四）が全て、室屋の一分の三、金村が三分の一、狭手彦は三分の二が先名型であり、金村を除いて先名型がその主要形式を為している。次世代以降では、咋が六分の三・長徳で五分の二と拮抗する。壬申の乱で功績があったと見られる馬來田（二）・吹負（三）・安麻呂（五）は全て、御行は六分の五が後名型と反転する。先名型から後名型への移行以上に、用いた資料性に起因するものと考えられる。先名型には大伴氏の家記による祖先への尊称表記、金村の後名型の多さはその施政に批判的な史料、壬申の乱功労者の後名型には、倉本一宏氏らが推定する「大伴吹負戦記」⁽³²⁾による影響が想定される。

また、同一人物で先名型と後名型の形式や人名表記の不統一は多事例あり、編纂段階で先名型・後名型の調整を熱心に行わなかった蓋然性が高い。さすれば、その表記から『日本書紀』の素材や記録者像を推考することが可能であり、これら先名型と後名型の相違は、編纂資料を究明する上での指標と成り得る。これまで行ってきた『日本書紀』を素材とした人名呼称表記の検証結果が、どの程度普遍化できるかとともに、今後の課題としたい。

末筆ながら、本稿の契機は、本学大学院在籍時に、指導教官の渡辺寛先生から「教授渡辺寛と渡辺寛教授では意味合いが違う。そのような表記の違いから日本書紀の分析を行っても面白いのではないか」とかけて頂いた御言葉にある。あれから自身の怠惰で一〇年を経てしまったが、ここに拙文を献じてその学恩に謝したい。

註

(1) 逆称・順称は黛弘道「位記の始用とその意義」〔『ヒストリア』一七、一九六八年〕、先名後姓・先姓後名は公式令授位任官条による。

(2) 黛前掲註(1) 論文。

(3) 平野邦雄「わが氏姓表記法の発展」〔『大化前代社会組織の研究』吉川弘文館、一九六九年〕。

(4) 黛前掲註(1) 論文。

(5) 阿部武彦「古代人の名と尊称」〔『日本古代の氏族と祭祀』吉川弘文館、一九八四年〕。

(6) 井上光貞「カバネ・位階・官職」〔『井上光貞著作集』第五卷、岩波書店、一九八六年〕。

(7) 吉田孝「氏」の構造——氏上と天皇——〔『律令国家と古代の社会』岩波書店、一九八三年〕、吉村武彦「六世紀における氏・姓制の研究」〔『明治大学人文科学研究所紀要』三九、一九九六年〕など。

(8) 令制的で、確実に編纂時の改筆と判断される氏+卿(四例)は、混乱を避けるためここでは除外する。第二章の(5)氏単独型の項で触れる。

(9) 田中卓「『天孫本紀』の系図」〔『田中卓著作集2』国書刊行会、一九八六年〕。

(10) 阿倍前掲(5) 論文。

(11) 大臣・大連制を否定する佐藤長門「倭王権における合議制の史的展開」〔『日本古代の国家と祭儀』雄山閣、一九九六年〕、黒田達也「日本古代の「大臣」」〔『朝鮮・中国と日本古代大臣制』京都大学学術出版会、二〇〇七年〕も見えるが、ここは従来からの、吉村武彦「仕奉と氏・職位」〔『日本古代の社会と国家』岩波書店、一九九六年〕が示す代替わりごとに承認される大臣・大連制像を前提とする。

『日本書紀』人名呼称表記(伊藤匡)

- (12) 日野昭「日本書紀の人名称呼法についての一考察」(『龍谷大学論集』三八六、一九六八年)。
- (13) 溝口睦子「大伴氏の現存系譜の考察」(『古代氏族の系譜』吉川弘文館、一九八七年)。
- (14) 田中卓「『紀氏家牒』について」(田中前掲註(9) 同書。初出は一九五七年)。
- (15) 竹本晃「古代人名表記の『連公』をめぐる」(『日本古代の王権と社会』塙書房、二〇一〇年)は、『日本書紀』に無い「連公」について、単なる謙称・尊称でなく、「政治的な意味合いが内包される呼称」とし、カバネ「連」より先行する可能性を示す。
- (16) 田中卓「『丹生祝氏本系帳』の校訂と研究」(田中前掲註(9) 同書。初出は一九五八年)。
- (17) 田中卓「不破の関をめぐる古代氏族の動向」(『日本国家成立の研究』皇學館大学出版部、一九七四年。初出は一九五八年)。
- (18) 田中卓「『因幡国伊福部臣古志』の校訂と系図」(田中前掲註(9) 同書)。
- (19) 中山薫「持統紀の人名表記について」(『日本書紀研究』二〇、一九九六年)は持統紀の先名型に注目し、持統紀が用いた史料上の問題に帰している。
- (20) 黛前掲註(1) 論文。
- (21) 溝口睦子「カバネ制度と氏祖伝承(下)」(『文学』五一―五、一九八三年)は、「日本書紀の人名表記でみると、継体、欽明以後に氏の名+称号+個人名の表記法が整然とととのつてきており、少なくとも文献資料は、このあたりに「姓」成立についての一つの画期をもつてきているようである」と、画期を継体・欽明朝に求めているが、雄略朝とも解せる。
- (22) 加藤晃「我が国における姓の成立について」(『続日本古代史論集』上、吉川弘文館、一九七二年)。
- (23) 森博達「日本書紀の謎を解く」(中公新書、一九九九年)、同『日本書紀成立の真実』中央公論新社、二〇一一年)。
- (24) 研究史については、山尾幸久『カバネの成立と天皇』吉川弘文館、一九九八年、中村友一「『氏姓』の成立とその契機」(『日

本古代の氏姓制』八木書店、二〇〇九年。

(25) 吉村武彦「古代社会と律令制国家の成立」(吉村前掲註(11) 同書) など。

(26) 加藤前掲註(22) 論文。

(27) 平野邦雄「日本書紀にあらわれた古代朝鮮人名」(『続日本古代史論集上』吉川弘文館、一九七二年)。平野前掲註(3) 論文。

(28) 黛前掲註(1) 論文。

(29) ③ 弁官八省の条文以下については、関晃「大化前後の大夫について」(『関晃著作集2』吉川弘文館、一九九六年。初出は一九六九年) の大宝令復元案による。

(30) 野田嶺志「入鹿と女帝」(『史苑』六一―二、二〇〇一年) は、蘇我氏専横説の根拠と指摘する。

(31) 中村修也「蘇我赤兄の再評価」(『王権と信仰の古代史』、吉川弘文館、二〇〇五年)。

(32) 倉本一宏「日本書紀」壬申紀の再構築」(『王権と信仰の古代史』吉川弘文館、二〇〇五年)。

(いとう まさよし・愛知工業大学名電高等学校教諭)